

近代的交通手段の登場

3月4日 西川武臣

そもそも江戸時代の日本では、車の発達がほとんどなかった。幕府は、東海道を始めとする街道での荷物の運搬に車を利用することを禁止し、ましてや人を車で運ぶということは考えてもいなかった。しかし、明治時代になると規制がなくなり、車の利用が急速に広がった。最初に横浜で利用された車は馬車で、1869年初頭に、東京と横浜を結ぶ乗合馬車の路線が開設された。この時、乗合馬車が走った道は、新たに造成された馬車道で、馬車は馬車道と東海道を經由して東京に向かった。また、1870年に、人力車が發明されると、同じルートを人力車が走るようになった。さらに、1872年10月14日には鉄道が新橋・横浜間に開通し、東京・横浜間の交通は大変便利になった。こうして人びとは歩くことなく2つの都市を行き来できるようになり、車は人びとの暮らしになくてはならないものになった。一方、海上交通では1869年以降、本格的な小蒸気船による東京・横浜間の旅客輸送が始まったが、1872年に鉄道が開通したことによって、その後は鉄道に客を奪われていった。

群馬県の蚕種商人、田島弥平の横浜旅中日記

明治四年未年七月一五日、桑柘園発足、村方石井次太郎船にて出帆

一六日、半陰半晴 平和なり

早朝、栗橋を發し、五ツ頃、中島村芦葉伊右衛門殿御蚕種請取、直に出帆の心得にて立寄に種の中、少し外へ遣し置、間に合兼、無余儀、要蔵のみを残し一同出帆す、夕刻、野田の茂木佐の店にて醤油を買、夜に入り流山に泊す

一七日

流山を發し東京に赴く、七ツ頃、東京着船、乗合一同にて船頭、船賃勘定、一六人、拾五両二朱

一九日

朝、東京出立、横浜江赴く、途中、人力車に乗り、夕刻、横浜に着、東京市中ならびに東海道中、人力車群集にて実に往来自在なり

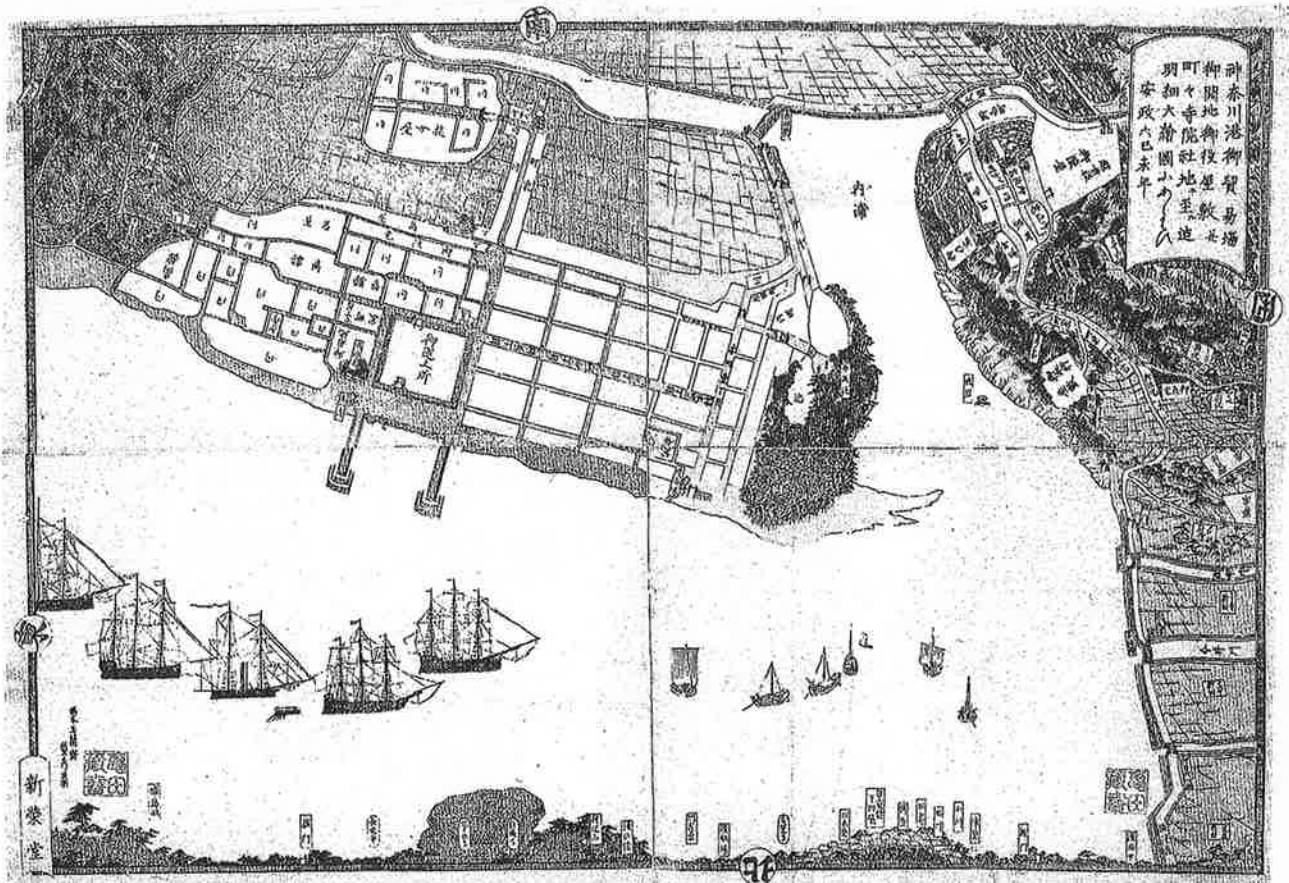


図7-15 津久井屋の引き札



表3-5 旅客数の変遷

年度	旅客
明治5年	495,078人
6年	1,415,225
7年	1,589,428
8年1~6月	895,188
8年度	1,667,724
9年度	1,584,162
10年度	1,584,509
11年度	1,606,048
12年度	1,790,072
13年度	2,084,221
14年度	2,111,078
15年度	2,213,551
16年度	2,154,895
17年度	1,963,174
18年度	1,359,346
19年度	1,740,442

出所：『横浜市史 4巻上』619頁第164表を引用。

図7-13 馬車の引き札



横濱 津久井屋馬車
 治ま合馬車を月曜日水曜日金曜日
 八時横濱より小田原迄 在街道筋至
 小田原迄
 横濱より戸塚迄 全き
 戸塚より 全き
 田原より 全き
 但仕立車と馬車は横濱から小田原迄
 毎日 築地、茅八時 出立
 横濱、茅三時 出立
 横濱、茅三時 出立
 シール、仲居
 敬白

出所：横浜開港資料館蔵。

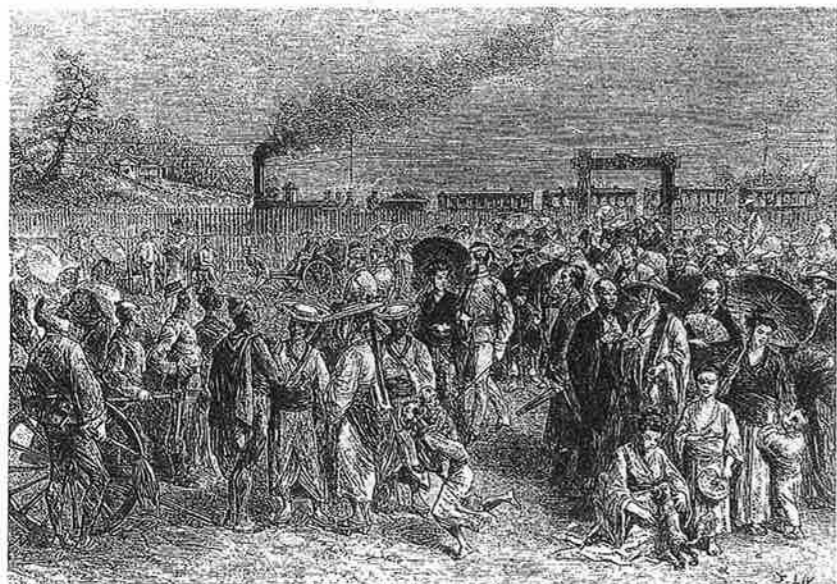


1 荷車を引く行商

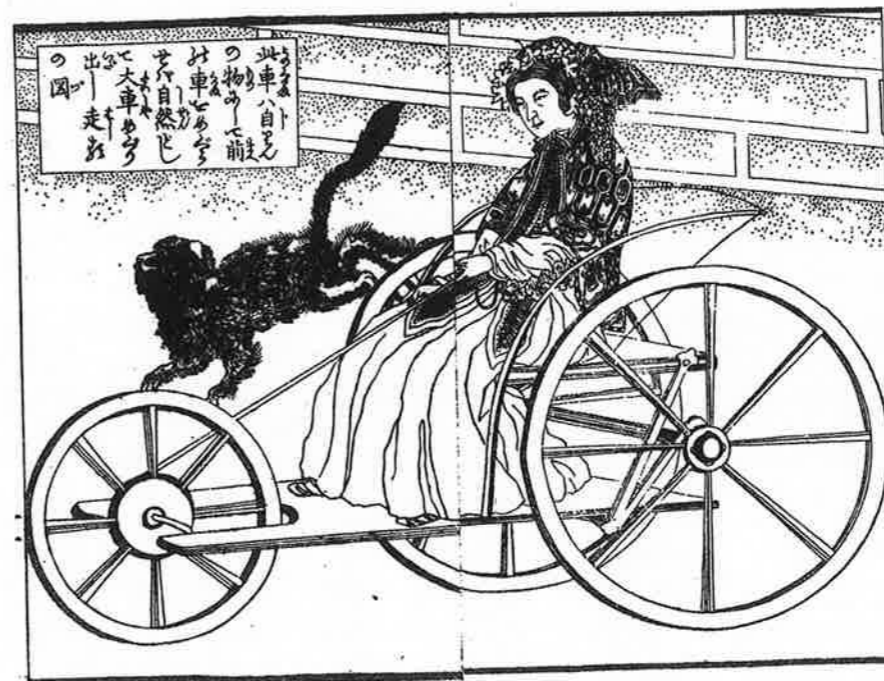
明治時代 横浜開港資料館所蔵写真

商品であるほうきやはたき、ざる等を荷車に載せて売り歩く行商人。従来は天秤棒で商品を運んでいたが、荷車を活用することで、大量輸送と効率的な移動が可能になった。荷車は移動式の商店にもなった。

図3-2 鉄道開通直後の品川駅頭的情景



注：フランスで刊行された新聞『ル・モンド・イリュストレ』1872年12月17日号に掲載された。
 出所：横浜開港資料館蔵。



1 三輪自転車

1865(慶応元)年 五雲亭貞秀画『横浜開港見聞誌』横浜開港資料館所蔵

横浜の街中を走っていた三輪自転車。洋犬とともに、自転車に乗った婦人が描かれている。解説文は「此車ハ自りんの物にして前の車をめぐらせバ自然として大車めぐり出し走るの図」と、その構造を書き記している。

表 3-1 1869年以降、京浜間航路に就航した蒸気船

船名	船主	船主住所
ホテル	船方用達	東京
カナガワ	G. W. ホイトほか	横浜
シティ・オブ・エド	G. W. ホイトほか	横浜
弘明丸	鈴木保兵衛ほか	横浜
オーヘン丸	J. アルマンド	横浜
キンサツ丸	J. アルマンド	横浜
明石丸		

出所：東京都公文書館蔵「神奈川往復書状留」・「達掛合」より作成。

表 3-2 シティ・オブ・エド号の乗客居住地

東京	68人	甲斐国	3人	上野国高崎町	1人
横浜	36人	下野国寒川郡	2人	上野国新田郡	1人
武蔵国幡羅郡	12人	北海道箱館	2人	相模国戸塚宿	1人
アメリカ人	5人	信濃国小県郡	2人	神奈川県役人	1人
イギリス人	5人	京都	2人	三河国碧海郡	1人
大坂	5人	諸藩藩士	2人	伊勢国松坂町	1人
政府役人	4人	武蔵国久良岐郡	1人	陸奥国盛岡町	1人

出所：東京都公文書館蔵「府治類纂」より作成。

図 7-11 弘明丸の引き札

東京 往 返 蒸 気 弘 明 丸 招 帖

弘明丸は、船の機件製造所、
中野、長崎と備、おもに新造、
良船なり。故、船の速、
四十馬力あり、
しかも、船の速、
下り、上り、
毎日往復し、

○ 船の機件は、
中野、長崎と備、
おもに新造、
良船なり。故、
船の速、
四十馬力あり、
しかも、船の速、
下り、上り、
毎日往復し、

○ 毎朝九時 東京出船
○ 毎日二時 横浜出船

○ 一等客 金三分
○ 二等客 金二分
○ 三等客 金一分

○ 小舟は、
大小、
大小、

○ 弘明丸は、
船の機件、
中野、長崎と備、
おもに新造、
良船なり。故、
船の速、
四十馬力あり、
しかも、船の速、
下り、上り、
毎日往復し、

七月十一日より

荷物運贈

永代橋下大川端町
三河屋徳兵衛
築地大波止場向
但馬屋金治郎
南新堀二丁目
河内屋徳兵衛前藏前
松坂屋宇右衛門

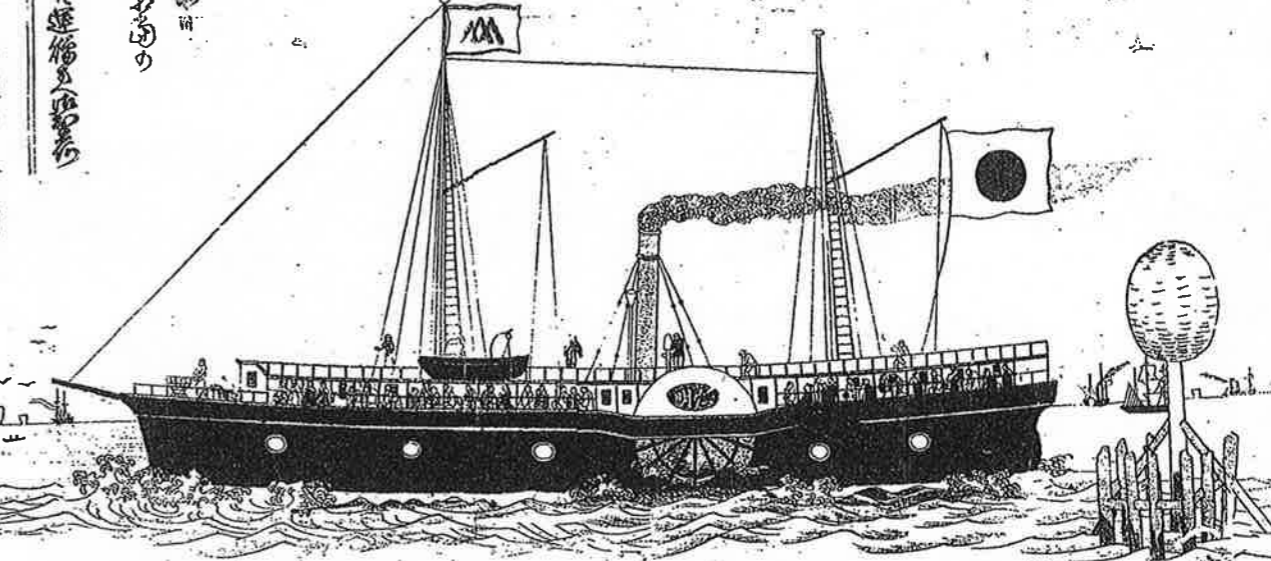



図 3-1 「横浜毎日新聞」に掲載された太平洋郵船の広告

太平洋海飛脚船

四番一社中名代シヨルジイレーン



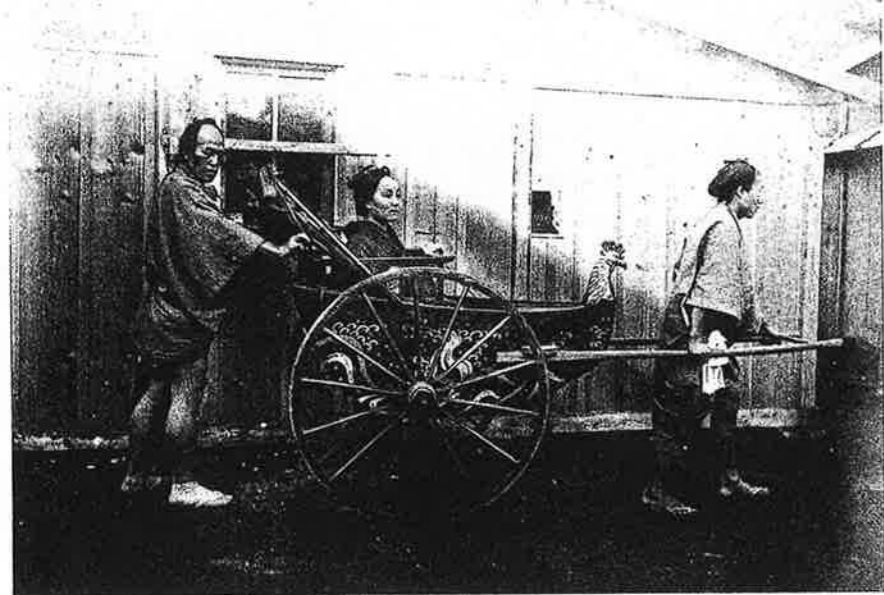
積込品薬名
硝酸硫酸
硝酸硫酸
硝酸硫酸
硝酸硫酸
硝酸硫酸
硝酸硫酸
硝酸硫酸
硝酸硫酸
硝酸硫酸

船名 ○○
上當リリコ
海港エコス
出タルン
帆兵○ヤリ
日庫右ン
割長五〇〇
崎艘エチ○

○ 一月廿一日
○ 同月廿八日

當港より箱館へ向け出帆日限不定

注：1873（明治6）年1月17日号に掲載された。船内への危険物無断持ち込みは禁止すると記されている。



1 初期の人力車
1872（明治5）年3月16日 THE FAR EAST 横浜開港資料館所蔵写真
舟形の車体に車輪をつけた人力車。車体の先端には、ニワトリの彫刻がつけられ、その側面には、裝飾がほどこされている。人力車が登場した当初は、車体の改良など、職人たちの間で試行錯誤が重ねられており、街にはさまざまな人力車が走っていた。

橫濱明細之全圖

